

Title	『四十二の物あらしひ』二本解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1999
Jtitle	三田國文 No.29 (1999. 3) ,p.36- 47
JaLC DOI	10.14991/002.19990300-0036
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19990300-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『四十二の物あらしひ』二本解題・翻刻

石川 透

解題

室町物語『四十二の物あらしひ』は、写本の多いことで知られている。そして、それぞれの写本に細かい相違が認められるのである。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』所収)では、大きく二系統に分け、それ以上細かくは分類していないが、本来ならば、細分化すべきであろう。その意味で、真下美弥子氏「御伽草子『四十二のものあらしひ』考」(『国語と国文学』一九八五年九月)は、資料を博搜し、細かな違いを明らかにした労作であり、一つの指針となりえている。

ここに紹介する二本は、前者は丁寧に写したきれいな写本であり、後者は奥書の入った珍しい写本である。筆者のもとには、これ以外にも『四十二の物あらしひ』の写本がいくつかある。いずれまとめて考察を加えてみたいと思う。

二本の書誌は以下の通り。

前者

所蔵、架蔵
形態、袋綴、一冊
時代、「江戸前期」写
寸法、縦一八・四糎、横二二・一糎
表紙、肌色地菱形模様表紙
外題、左上金紙題簽「四十二の物あらしひ」と墨書
内題、ナシ
料紙、間似合紙
行数、半葉一〇行
字高、約一五・五糎
丁数、一三丁
印記、表紙見返しに「御書物」の朱印

後者

所蔵、架蔵
形態、袋綴、一冊
時代、文化二年写

寸法、縦二六・七糎、横一九・八糎

表紙、紺色刷毛引き表紙

外題、ナシ

内題、ナシ

料紙、楮紙

行数、半葉八行

字高、約一九・〇糎

丁数、二二丁

印記、第一丁表に「松本文庫」の朱印

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかつた。虫食いによる欠落はおよその字数を□で示した。

四十二の物あらそひ（題簽）

むかし、ならの御かとの御ときとかや、おりふし、とうくうへ、ならせおはします。二月なかの六日のころなるに、なんてんのさくら、ゆふはへにあかぬいろをそへ、みきはのやなきは、もよきのいとをみたしたれたるか、うたかはるゝに、よろつなめおはします。

はる色をませは、とうくうへおほせらるゝは、「春と秋と、いつれおとらぬことなれとも、なを、ものゝあはれをとゝめ、

ことにふれてかなしきは、秋のゆふへにて侍り。もろこしには、はるをあはれみ、わかつてうには、秋をあはれむとこそみえはんへれ。いかに、おほしめさるゝにや」と、おほせられければ、中くうの御かたより、みとりのうすやうに、

おほかたはあらそふころとしりながら

心ひとつを秋にさためん

とあそはして、こしゝうの君して、たてまつり給ふ。「おんなは、あきをあはれむ事に」とて、御つれゝにおほしめすほとなれば、「これをよしみとして、四十二のものあらそひあるへし」とて、御まへにさふらひければ、まいり給ふ。

いろゝのうすやうともに、さまゝのこをあそはして、中くうのかたをはしめて、いま四十一人なれば、くきやうてんしやう人も、そのほか女はうたちも、かほうちあかめてさふらひ給ふ。これまで、まつ、うへより、

月のよと

ゆきのあしたと

ふる雪のつもらぬかけもありあけの

月そくまなきふゆの山さと

うへより、

ひかし山と

にし山と

月かけのいてつる山もわすられす

入かたにすむ我心かな

うへより、

しくれと

松かせと

わきてなをあはれならめや松風も

おとにしくれてかゝらさりせは

ひやうふきやうのみやより、

よふねこくと

ころもうつをとゝ

ころもうつやとにはゆめもかよひけり

ねられぬものはよふねこくをと

やまひにくすりをあたへたると

恋しき人にあふたると

うれしさはいつれもおなしいろなれと

恋しきかたへひくこゝろかな

宮内卿のみやより、

かせになみよるやなきと

露にしほるゝすゝきと

あをやきのかけふむみちにやすらはん

まねくすゝきはさもあらはあれ

せいりやう殿の女御、

はきと

おきと

むらさきの露もあたるななめより

みにしむ物はおきのうはかせ

きりつほの宮す所より、

てと

歌と

はま千とりそれともわかぬあとそうき

わかのうらにはまよひはつとも

大みやより、

かひおほひと

すころくと

ひし／＼とつといておほふかいよりも

たゝふたりゐてめをそろんせん

中くうの御かたより、

ほとゝきすと

うくひすと

むめかえにさへつるはるのあしたより

なをめつらしきほとゝきす哉

くはさんのるんの女御、

うとまるゝ身と

あかぬわかれと

かはる身はうきになくさむかたもあり

あかぬわかれのみちそかなしき

へい大なこん、

あか月のわかれと

ゆふへの思ひと

あか月のたもとの露もかすならす

ゆふへの袖のぬるゝけしきは

二てうの院の大夫うこん、

枝に色こきもみちと

庭にさひしきおちはと

もみちはをさそふあらしもつらからし
にはのにしきにしく物そなき

みめと
しほと

九てうのさいしやう

しほやかぬうらそさひしきからさきの
松のすかたも何にかはせん

たのめてとはぬ夕暮と
かへるあしたのなこりと

三みの中しやう

あか月のわかれの袖の露よりも
とはぬうらみそやるかたもなき

思へとかなはぬと
うらみあると

こ中將

なからへはせめてあふよもありぬへし
思はぬ人をまつそくるしき

きくと
むめと

六てうみん中なこん

しらすくのうつろふ色はみるもうし
のきはの梅のかをそしのはん

みねにさけふさるのこゑと
しかのなくねと

四位のせうしやう

うき事はましらのこゑにきゝそへて
つまこふしかのねこそつらけれ

とをさとのけふりと
みねにわかるゝよこくもと

さゑもんのかみ

とをさとや一すちたてる夕けふり
みねゆくくもにまかふ物かは

夢と
文と

七てうのさいしやう

はかなしやまれにまちみる玉つきに
みしよのゆめをなにとへん

のきのしのふと
いはねの松と

くはさんの院のひんこ

さひしさはいはねの松やまさるらん
のきのしのふはあまりめなれて

しやうやう人かうらみと
わうせうくんかかなしみと

ときはの大將

なけきゆくみちのくさはのつゆよりも
まとうつ雨やそてぬらすらん

しうとめと
まゝはゝと

ほり川の中しやう

むさしのゝゆかりのくさもつらけれど
なをうき物はおやならぬおや

はいたんのおきなと

つりするあまと

中くうの御せうとひやうゑのかみ

すみかまのけふりになるゝ袖よりも

つりするあまやそてぬらすらん

をみなへしと

露にしほるゝなてしこと

ないしのかみの君

をみなへししほるゝのへとまちぬれと

なをうとまれぬやまとなてしこ

雲井のかりと

みきはのおしと

そつの君

はかなしやみきはのおしのうきまくら

雲ゐのかりにおよふへきかは

あふてあはさる恋と

あはぬ思ひと

うへの御めのと

あひみてののちの心にくらふれば

むかしは物をおもはさりけり

ふちと

山ふきと

中くうの御方の女はう大なこんの君

いけ水のそこさへにほふふちなみは
たとへてもみしいての山ふき

うのはなと

つはきと

大なこん

玉つはき八千世ふりたる色みれば

よをうのはなもなにゝかはせん

伊勢と

かもと

女ゐんの御かたより

ひさかたのあまてる月のひかりには

あらそふ物かかもの水かき

おなし御かたより

八幡と

くま野と

いはしみつきよきなかれもわすられず

なを身にしむはみくまのゝうら

せんほうと

らいさんと

とはのそうしやう

なむしゝんよりすはりたるうへよりも

かほとかなるやていしていさん

中くうの御かたのみやうふの君

あちきなしとみのお川のなかれより

こけむすやとに月をなかめん

おなし心を

こうきてんの御くしげ

なかれあるとみのお川もなにならん

こけむすやとの月をなかもん

とうくうの御めのと大なこんのすけ

おちそめしおちはかうへの露よりも

おほろ月よのかけそこひしき

つち御かとの中なこん

しきしまややまとことのはありぬれば

みるかひもなき水くきのあと

とをくてまれにあふ恋と

ちかくてあはぬこひと

中しやうの君

よそにみる花のすかたを思ひても

あひみぬこひそしつ心なき

かしはきのゑもんのかみ、女三の宮の思ひゆへ、むなしく

なりしと

有明の大しやう、やまふかく成しと

思ひ入月はこよひとたのむとも

きえしけふりそゆきかたもなし

みめと

ふりと

二てうのう大しやう

さしすきてうちしめやかかのふりを見ん

みめもみさまもなにゝかはせん

色くゝにさためおはしましゝ中にも、とはの大しやうのしや

うやう人が歌にも、てんはかゝりけり。そのゝち、御さかつき

まいりけるに、十六日の月なれば、やうくゝすみのほり、さま

くゝ御あそひせさせたまふ。なをし、かりきぬのすかたにて、

ふき物ふき給ひける。

中くうの御かたは、二十一にならせたまひける。しろき御き

ぬに、やなきの五つに、くれなるの御はかま、おなし色のこう

ちき、きちやうおしやり、さうのことかきならしたまふ。これ

そ、かすみの中のかはさくらなども、かくやとおほゆ。

御せうとひやうゑのすけ、なをしけさうし、花やかにて、よ

こふえふき給ふ。くまなき月にさしむかひて、うつくしともお

ろかなり。

御ひわ、ゐんの御かた、中しやう、わこん、おほゐの君、お

もしろくしやうかし給ふ。くはさんのゐん、ひちりきふきたま

ふ。かりそめの御あそひなれとも、折からや、身にしむ心ちす。

むかしの人は、かく物うきに、くまなくおはしますなり。

〔四十二の物あらそひ〕

むかし、ならの御門の御時にや、折ふし、春宮の御かたへ、

ならせおはします。きさらき中の六日のころなるに、南庭の桜

は、夕にあかぬ色をそへ、みきはの柳は、もえきの糸をたれた

るかと、うたかはるゝに、よろつなかもおはします。

とうくうに仰らるゝは、「はると秋と、いつれおとらぬ事な

れとも、なを、ものゝあはれをとゝめられて、すこしかなしき

は、秋の暮に侍り。もろこしには、春をあはれみ、吾国には、秋をあはれむとこそ見えて侍れ。いかに、さためおほせらるゝにや」と仰ければ、中宮の御かたより、みどりのうすやうに、

おほかたはあらそふものとしりながら
こゝろひとつに秋をさためむ

とあそはして、小侍従の君して、たてまつり給ふ。「女房は、あきをあはれむ、ことほりをもまことに」とて、わらはせおはします。

うへも、いつより、つれづれにおほしめすほとなれば、「これをはしめとして、四十二のものあらそひあるへし」と、御まへにさふらひぬる内侍のすけなと、御つかひありければ、まいり給ふ。

色づくのうすやうに、さまざまの事をあそはし、中宮の御かた、始として、今四十一なれば、公卿殿上人、女房たちも、かほうちあかめてさふらひ給ふ。まつ、うへより、

月の夜と 雪の朝と

ふる雪はつもらぬかけも有明の

月そくまなき冬の山里

春宮の御かたより、

ひかし山と にし山と

月かけのいてつる山もわすられて

いりかたにすむ我がこゝろかな

中宮の御母、きさひのみやより、

時雨と 松風と

わきてなをあはれなりしと松風の

しくれのおとにかよはさりしを
兵部卿のみやより、

衣うつおとゝ 夜ふねこくおとゝ
衣うつやとには夢もかよひけり
ねられぬものは夜ふねこく音

御門の御おとゝ、中務の宮より、

やまひに薬得たると 恋しき人にあへると
うれしさはいづれもおなし色なれと
こひしきかたにひくこゝろかな

弘徽殿の女御より、

風になみよる柳と 露に□ほるゝ薄と

青柳のかけふむみちにやすらはむ

まねくすゝきのさもあらはあれ

清涼殿の女御、

萩と 萩と

むら萩の露もあたるみたれより

身にしむものはおきのうはかせ

きりつほの御息所より、

千とりと 歌と

浜千とりそれとも見えぬころそうき

和歌の浦はにまよひはつとも

くはう后宮の宮より、

かひおほひと てまりと

黒かみのみたれてきはくまりよりも

かいそか□れる袖そなつかし

とうくうの御おと、右の大臣、

うくひすと ほとゝきすと

うくひすのさえつる春のあしたより

なをめつらしきほとゝきすかな

中宮の御せうと、左大将、

うとまるゝ身と あかぬわかれと

かはる身はうきになくさむかたもあり

あかぬわかれのみちそかなしき

関白の御嫡子、平大納言、

暁の恋と 夕のおもひと

あかつきの袂の露もかすならず

夕の袖のぬるゝけしきいほ

二条の中納言、

枝に色こき紅葉と さひしき庭の落葉と

もみちはをさそふあらしもつらからず

庭のにしきにしくものそなき

九条の宰相、

みめと しほと

しほやかぬ浦そさひしきからさきの

まつすかたも何にかはせむ

宰相の中將、

みめと ありかと

かつらきの神は夜ともちきりけり

しらすありかをつゝむならひは

近衛の大將、

花と 紅葉と

もみち葉のちり行秋の夕より

花にものうき風をうらみむ

三位の中將、

たのめとはぬ夕暮と 帰る朝のなこりと

あかつきのわかれの袖の露よりも

とはぬうらみそやるかたもなき

頭の中將、

おもへともかなはぬと 恨あると

なからへはせめて逢せもあ□ぬへし

おもはぬ人をまつそくるしき

六条院の中納言、

きくと むめと

しらきくのうつろふ色を見るもうし

軒はの梅のかせやしのはむ

四位の少將、

峰にさけふ猿の声と 鹿のなくと

うきことはましろの声に聞そへて

つまこふ鹿の音こそつらけれ

右衛門督、

とをさとのけふりと 峰にわかるゝ横雲と

遠里や一すちたてる夕けふり

みね行く雲にまかふものかは

五条の宰相、

文と 夢と

はかなしやまれに待見る玉章も

見し夜の夢を何にたとへん

花山院のしゝうの君、御年十一にて、

岩根の松と 軒端のしのふと

さひしきは岩根の松やまさるらん

軒のしのふはあまりめなれて

常盤の大將、

上陽人か恨と 王照君か悲と

なげきゆくみちの草葉の露よりも

窓うつ雨や袖ぬらすらむ

白川の大將、

しうとめと まゝはゝと

むさし野ゝゆかりの草もつられれと

なをうきものは親ならぬおや

中宮の御せうと、

はいたんの翁と 釣する海士と

すみかまのけふりになるゝ袖ロヨリよりも

釣するあまや袖ぬらすらん

ないし君イニナシ、

女郎花と なてしこと

おみなへししほるゝ野へにましれとも

帥の君、

雲井の雁と 汀の鴛と

はかなしやみきはにおしのうき枕

雲るのかりにおよふへきかは

上の御めのとこ、

逢てあはぬ恋と ひたすらあはぬ恋と

逢見てののちの心にくらふれば

むかしはものをおもはざりけり

中宮の御かたの女御、大納言のすけ、

藤と 款冬と

池水の底さへにほふ藤なみに

たくへてもみしいての山吹

逢坂の大臣の御子、右の中將、

うのはなと つはなと、

玉つはき八千代ふりたる色みれば

よをうの花も何にかはせむ

かやうに、あらしひあそはしけるところに、院の宰相参り給て、

此よしを申給ひければ、とりあへず、女院ともにわたらせおは

しまして、御門、「おもひよらぬたゝ今の行幸、何事にか」と、

おとろかせおはしましけるに、「つれくゝに侍る折ふし、かゝ

る御あそひと、うけたまはりてまいり侍る」と、おふせらるゝ。

いまた、神のあらしひは侍らすとて、

伊勢と 賀茂と

久かたのあまてる月のひかりより

あらしふものは賀茂の水かき

女院の御かたより、

八幡と 熊野と

石清水きよきなかれははすれねと

身にしむものは三熊野のうら

女一の宮、御ものゝけにて、煩ひ玉ふころ、世尊寺の僧正、御加持にまいり給ふを、めしありて、

せんほうと らいれいさんと

なむしたんよりすちりたる声よりも

おほとかなれやていしていさん

其後、御門より仰らるゝ、

見めよく、しなたかく、やさしき上臈の、むくらにとちられて、あさましくすたれて、なくさむものとは、歌をよみ、管弦をして、日を暮したらんと 又、年よりたる翁の、俵によりかゝりて、おきなかもこのこそ、わこせか物よと、わなゝきふるひたらんと

いつれたるへき、女房たちの御かたへとて、御すゝりくたりければ、ないしのすけとて、中宮の御方の女房、

あちきなしとみの小河の流れより

こけむす宿の月をなかめむ

弘徽殿のみくしけとの、同じ心を、

なかれあるとひのを河に住なれて

こけむすやとはよそになかめむ

源氏の、女三の宮、かしは木の右衛門の督の文を、しとねの下より見つけられて、あさましきと うきふねの、兵部の宮の御事を、かほる大将にしられ奉りて、すゑの松山とかきて、つかはされたりしころと

いつれか、つらかりける、みやうふのきみ、うきふねの身をこかしけるおもひより

しとねの下にしくものそなき

おほる月夜のなしいしのかみに、こうきてんのほそとのにてあひそめし、源氏の心と おちの宮、夕きりの大将、を野にて見そめしと

とうくうの御めのとこ、大納言の君、

おきそめし落葉かうへの露よりも

臈月夜のかけそ恋しき

手のよからんと ことはのたらひたらむと

しき島や山とことはのあれぬれば

見るかひもなし水くきの跡

あひと すかたと

よそに見るはなのすかたをしひひても

あひみぬ言葉しつころなき

かしは木のゑもんのかみ、むなしくなりしおもひと 有

明の大将、山ふかく入給ひしかなしさと

おもひいる月はこむ夜とたのむとも

きえしけふりの行かたもなき

これ迄、四拾弍首になりぬれば、いろくさためおはします中にも、常盤の大将の、上陽人の歌にこそ、まつ点はかゝりける。それより、つきく、十一しゆにかけさせおはします。

其後、御さかつきまいりけるに、十六夜の月なれば、やうくすみのほりけるに、色くの御そ、いろくのなをし、かり衣のすかたにて、とりくに、ひきもの、ふきもの、たまはりて遊はしける。

中宮の御すかたは、たゝ今、二十一にならせおはします、し

ろき御そのなかに、柳の色のきぬ、をかしげにきなし給ひて、さうの御ことによりいらせおはします。たゝならぬ御事にて、御さとへ、いておはしますへきを、御心あかす、かなしく思しめすなり。

御せうとの兵衛の君、こき織ものゝ御直垂、御なおしに、さうはなやかにて、よこふゑをふき給ふさま、くまなき月にさしむかひて、うつくしともおろかならず。中宮の御かほに、よくかよひ給へるも、ことさらうたしと、御門御らんす。

みかとは、御ひは、南の御かた、わこん、りちのしらへにて、おりおもしろく、おほいと、その子、まつら人、うたひ給ふ。花山の院の御子、小侍従の君、いまたわらはすかたにて、ひちりきふき給ふ。女院の御かたには、羅の御きぬ、かつけさせおはします。

かりそめの御あそひとおもへとも、こと更身にしむはかり、西国やうくあけかたになりゆくに、みかと、くはんきよならせおはします。ときはの大将は、ないしの君のおもかけ、かたときもわすれず、おほしこかるゝとなむ。

過にしむ月のすゑ、うらゝかにかすみ、くまなき夕部のとりの音も、またうち出す。庭の木すゑも、花かとまかふあは雪たに、この春はふらて、のとかなれとも、かたへは、また冬こもぬるに、やとさひしければ、ちかく侍る。れいのそれゝにつけ、歌さくり、たいなとよみて、まひのなくさみにせはや。なくたはふるゝ折ふし、萩とおみなへし、かきたるたゝう紙をとり出て、「いつれか色まさり侍らむ。こゝろのゆくかたにこ

そ、かちまけもあるへし。まつ、今夜のもてすきひに、あらぬわかちにてもよみては」と、人の申侍りければ、

おらてしもうつろひやすきにしきより

さか野ゝ秋の花そゆかしき

と、たはふれ侍れば、みな人、かきりなふおかしかりて、「これをよすかに、おなしからん事、かきならへて、心くしのなさためきかまほし」といへは、「けに、めつらしきわさかな。むかしも、さるためしなきにしもあらぬは、いきさくりて、かたはらいたき事、いひなくさまん」とて、きさらきはしめの日とさためて、みそかにあへしわつらふも、にくからぬわさにこそ。

十五首しなされための歌、

落花と 落葉と

ちりしける花のにしきもわすれねは

なをうれたきは木からしの庭

古と 新と

空秋の風に吹来る匂ひより

しのふはなれし袖のうつり香

色と にほひと

たくひなき色にうつるもならひなれと

なを身にしむはにほひ成けり

松風と しくれと

夕しくれふるや軒はのさひしさも

なくさむものは庭のまつかせ

鶯と ほとゝきすと

ひと声とねかふさ月の鳥よりも

のとけき春の庭のうくひす

梅と 桜と

かもそひてふかきは梅の色なから
いかてさくらにおもひかへまし

紅葉と 菊と

きくもみちいつれおとらぬ詠に

(欠)

なかめさうくしく日を経るまゝ、くれはとりあやしの袋に入、多数やさしと、ことの葉のほくとも、つかねたるあり。しかしかたにゆかしき事もあるにて、おれくしくり返し見るに、いそのかみふるき世の、かたみならんとおほゆる。かみしもひとしからざる、あれたる鳥のあとをさかしもとめたり。しかあれとも、すゑのかたはきれくとなりて、半はうせぬ。いつれの誰かはこのうちにひめしや。いさや川のいさしらす、紙はむむしにあたへたりしことならむ。春の小山田かへすくもなけくに、かひなく、くすのうら葉のうらむにあまりあれとも、其俣にたゝみかさね、むもれ木のひとしれず、わすれ水のわすれんこともほいなく、かりそめながら、かいつ
けすねのいとたへす、松の葉のちりうせすと思ふも、うけはりたることにはあなれと、此終のくちすたれたるを、編繼くうとんけをまつことも、又おろかならずや。

ふちはらのたゝのりしるす

文化二年歳次己丑暮秋書於直廬

(いしかわ とおる)

ゆるやかなるまつりこと十あまりひとつのとし、う月中の
二日